

受検者数4万人に回復、『日本語力』への期待も

＝平成29年度第2回日本語検定＝



日本語の総合的な能力を測る「日本語検定」（略称・語検）の平成29年度第2回（通算第22回）検定が、11月10日（金）と11日（土）に行われました。国内は47都道府県86カ所の一般会場と681カ所の準会場、海外は韓国（ソウル）、アメリカ（グアム、ニューヨーク）、オーストラリア（シドニー）、ドイツ（フランクフルト）の4カ国5カ所で実施され、前回は12・1%（4376人）を上回る4万508人が受検しました。

「語検」は、敬語や文法、語彙（ごい）、表記など6つの領域にわたり、日本語を正しく使うことができるか、一人ひとりの能力を測るものです。1級から7級まで、小学生から社会人まで幅広い年齢層を対象としています。検定結果は、12月上旬に語検ホームページで合否速報が発表され、同下旬には個人カルテと認定証が発送されます。

今回の受検者数は、1級（社会人程度）727人、2級（大学卒業程度）3897人、3級（高校卒業程度）1万5542人、4級（中学校卒業程度）8816人、5級（小学校卒業程度）6017人、6級（小学校4年修了程度）4152人、7級（小学校2年修了程度）1357人。前回と比べて3級は1割減ったものの、ほかの級は5級の8割増を筆頭に軒並み増加したのが特徴で、1年ぶりに4万人の万台を回復しました。

受検者数が回復した要因として語検事務局は、小中学校レベルについては、「（今年3月に改訂された）新学習指導要領で言語力や思考力を育成することが重要とされたことが影響しているのかもしれない」と語り、児童、生徒の進学などを意識した教師や父母が語検に注目・期待した可能性を指摘。就職活動を控えた大学生やサービス関連の企業などでも『日本語力』を高めたいという意欲は高まっている」とみています。

最年長者は5級を受検した兵庫県の93歳の女性、最年少者は6級を受検した東京都の幼稚園に通う6歳の女の子でした。

◆693人が受検＝東京23区会場



東京23区の一会場となった千代田区の上智大学四谷キャンパスでは、693人が1級から7級に挑戦しました。

東京都心はこの日、初冬の寒さが緩んだものの、ジャンパーやコートなどに身を包んだ受検者が目立ち、校門をくぐると足早に受検会場の校舎に向かっていました。検定が始まる1時間前には教室の扉が開いて入場。着席すると検定に備えて筆記用具を机の上に並べたり、問題集に目を通したり。開始15分前には監督者が読み上げる注意事項に耳を傾けていました。100人ほどが入る大きな教室から20人ほどの小さな教室まで、級ごとに分けられた教室に入り、午前と午後の2回に分かれて受検しました。

◆問題を解くには日本語が必要

最初に2級の会場で、受検者にインタビューしました。

かつて書道塾を開いていたという江戸川区の男性（74）は、3級を取得した前回6月に続いて2回目の受検。小学1年生から中学3年生まで5人のお孫さんに、「これまで数学を教えてきたが、理解力をつけるには国語も教えなければ」と考え、自己点検のために語検にチャレンジ。学生時代には感じなかった日本語の難しさを実感しているという。

◆ 仕事に、採用試験に、役立てる

情報通信（IT）関係の会社で働く練馬区の男性（34）は、職場仲間の紹介で語検を知った。「メールのやり取りなど仕事で役立つ」と考え、語検に初挑戦。IT関係の資格を得るため検定を受けたことはあるが、「一般教養の検定は初めて」とやや緊張の面持ちで取材に応じてくれました。

日本文学と教育学を学んでいるという西東京市の大学3年の女性（20）は教員になるのが夢。受検雑誌に「教員採用試験に役立つという広告が出ていた」のを見て語検への挑戦を決断。問題を解いてみたところ「敬語（の使い方）を分かったことが多かった」と話し、既に問題集から得た「収穫」に笑顔を見せていました。

◆ 「正しい日本語」を身につける



6級の会場には子どもの姿が目立ちました。マレーシア人の両親と一緒に江東区に住み、江戸川区の「英語の学校に通っている」という女の子（11）は、正しい日本語を身につけるため7級を取得済みで6級にチャレンジ。港区にある私立学校への進学を目指しており、「将来は音楽の先生か作家になりたい」と目を輝かせていました。

受検会場の一角に設けられた保護者控え室をのぞいてみました。

初めての受検で6級に挑戦する長女（9）に付き添ってきた板橋区の父親は、「娘には正しい日本語を身につけてほしい」と真剣な眼差しで話し、ご自身の苦い体験を披露してくれました。23年前に高卒で中国から来日し、大阪の日本語学校と大学を経て、「自分の経験を生かせる」プロジェクトに関与できる幸運に恵まれ、東京で就職。中国の世界遺産を日本のIT技術で記録・保存するプロジェクトだったが、せっかく身につけた言葉（大阪弁）が東京では通用せず、非常に苦労したとのこと。

◆ 表現の基本は『活字』

控え室には母親の姿もありました。住まいのある千代田区の幼稚園に通う娘さん（6）は既に7級を取得し、6級への挑戦。「活字のない世界では育てたくない」と考える両親は、子ども新聞の読み聞かせをゼロ歳児から開始。今や娘さんは、こども新聞を自分で読み、絵本や児童小説はもちろん、時事問題を扱った新刊本を買ってほしいとねだることも珍しくないとか。母親は、「本も書きたい、絵も描きたい」と夢を膨らませる娘の成長に目を細めながらも、インターネットの普及などで便利になったことへの疑問も口にし、「表現の基本は活字ですから」ときっぱり。思考や表現、コミュニケーションの土台となる正しい日本語を身につけてほしいという親心がひしひしと伝わってきました。



（時事通信社編集委員 升谷昇）



次回
予定

文部科学省後援事業 **日本語検定**

平成**30**年度 第**1**回（通算第23回）

一般会場 **6/9** (土) 準会場 **6/8** (金) ・ **6/9** (土)

申込期間 **3/1** (土) ~ **5/11** (金)